

「脱いじめ傍観者教育」動画教材に対する視線動向 —視聴者の攻撃性による違い—

五十嵐 哲也* 早川 実希† 福田 博美†† 青山 郁子††† 谷山 大三郎††††

*学校教育講座

Eye Movement toward Video Material on Anti-Bullying Education for Bystander : Difference of Aggression among Viewers

Tetsuya IGARASHI*, Miki HAYAKAWA†, Hiromi FUKUDA††, Ikuko AOYAMA††† and
Daizaburo TANIYAMA††††

*Department of School Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

要 約

本研究は、「脱いじめ傍観者教育」に用いられる動画教材を題材として、その視聴者の攻撃性による視線動向の違いを検討した。具体的には、動画教材のうち、いじめ加害者・被害者・傍観者が同時に映っている場面3秒を分析対象として、それぞれの登場人物を最初に見るまでに要した時間、対象領域への視線停留時間、対象領域への視線停留回数、別の箇所を見て対象領域に再び視線を戻した回数を検討することとした。また、対象者には、動画視聴後に、攻撃性に関する質問紙調査に回答してもらった。研究参加に同意した52名を対象に検討した結果、「言語的攻撃」低群は、いじめ被害者に対して「別の箇所を見て対象領域に再び視線を戻した回数」が有意に多かった。一方、「言語的攻撃」高群は、傍観者に対して「別の箇所を見て対象領域に再び視線を戻した回数」が有意に多かった。

Keywords : 視線動向 攻撃性 脱いじめ傍観者教育

1. 問題と目的

令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査(文部科学省, 2022)によれば、令和4年度間に全国の小学校、中学校、高等学校、特別支援学校で認知されたいじめは681,948件であり、過去最多であった。いじめの防止について、生徒指導提要(文部科学省, 2022)は、周辺で暗黙の了解を与える「傍観者」の中から勇気をふるっていじめを抑止する「仲裁者」や、いじめを告発する「相談者」が現れるかどうかのポイントになると指摘している。実際、小学生、中学生、高校生を対象に実施された調査に基づく実証的研究においても、クラスにいじめを止める雰囲気がある場合にはいじめを止める行動

を取るとする者が多いことが明らかにされている(藤川・青山・五十嵐, 2016)。

このような指摘に基づき、子どもたちの「傍観者」としての認識を変化させ、「仲裁者」としての行動に結びつけようとする取り組みが始まっている。動画教材「私たちの選択肢」(阿部・藤川・山本・谷山・青山・五十嵐, 2018)は、そのような目的を達成するために作成され、様々な学校で実践が行われている。

「私たちの選択肢」の内容は、クラスの中でいじめが深刻化していく状況を見ている「傍観者」の視点から、物語が展開していくプログラムである。受講者である生徒は、映像を視聴しながら、「加害者」や「被害者」ではなく「傍観者」として主人公がもし自分であつたらどう考えるか、どのように行動するかを考え

† 愛知県立いなざわ特別支援学校 Inazawa Special Support School, Inazawa 492-8364, Japan

†† 養護教育講座 Department of Health Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

††† 都留文科大学文学部国際教育学科 Department of Global Education, Tsuru University, Tsuru 402-8555, Japan

†††† スタンドバイ株式会社 Standby Corporation, Chuo 103-0004, Japan

ながら授業が展開されていく。そして中学生を対象とした授業効果としては、教材の視聴によって、もともとの学級風土が良好な学級に所属している生徒はいじめを目撃した際に制止行動を取りやすくなるといったことが明らかとなっている（青山・五十嵐，2019）。

しかしながら、動画教材の見方は個人によって多様であることが想定される。「私たちの選択肢」の主人公は傍観者であるが、必ずしも全員が主人公に着目しながら視聴しているとは限らないであろう。今回、我々は、視聴者の特性によって視聴状況に違いが生まれる可能性を想定した。その際、特に視聴者の攻撃性による違いを検討することによって、攻撃性の高い者へのいじめ場面の捉え方に対する支援について示唆が得られるのではないかと考えた。そこで、本研究では、この点を明らかにするために、視線分析機器を用いて動画教材の視線動向を分析する。その際、視聴者の攻撃性の違いによって視線動向がどのように異なるかを検討する。

II. 方法

1. 実施時期

2022年9月に実施した。

2. 対象者

インターネットなどによって協力を呼びかけ、承諾を得られた55名を対象とした。協力を呼び掛けるにあたって、研究への参加によって謝金が支払われることを伝えた。ただし、実際には3名が辞退したため、分析は52名を対象とした。参加者の割合は、女性が39名、男性11名、無記入2名であった。また、参加者は全員が学生であり、年齢は18～25歳（平均年齢21.38±1.44歳）であった。

3. 提示課題

脱いじめ傍観者教育の動画教材である「私たちの選択肢」（阿部・藤川・山本・谷山・青山・五十嵐，2018）を視聴してもらった。本動画教材では、授業中に教材として使用する中で中学生が2つの選択肢からそれぞれがどちらかのパターンを選択することにより、2パターンの結末が上映される仕組みとなっている。ここではその結末をどちらも視聴してもらうこととし、その結末の提示順序はほぼ同数となるように設定した。また、対象者には、「これから見ていただく動画は、中学生が授業の一環として教室で見るとともに作られたものです。そのため、途中で2つの選択肢のうちどちらかを選ぶように求める場面がありますが、今回はその選択は行いません。動画は、本来、その選択に基づいて2つの展開に変化しますが、今回はその2つの展開の全てを連続して見ていただきます。展開

1（あるいは2）から展開2（あるいは1）へ順番に動画が進みます。動画の最後は、動画全体の解説があります。その最後まで視聴してください。」と記した紙を提示した。

4. 視線測定

Gazepoint 3 Eye Tracker（Gazepoint 製）、画像を提示するモニターとして23型ワイドディスプレイ（iiyama 製）を使用し、静かで落ち着いた場所で視線を計測した。分析対象は、開始から9分30秒後のいじめ加害者・被害者・傍観者が同時に映っている場面3秒とした。Area of Interest：AOI（興味関心領域）をいじめ被害者（AOI1）、いじめ加害者（AOI2）、傍観者（AOI3）、主人公（AOI4）に四角く区切って設定した。

分析では、対象領域を最初に見るまでに要した時間、対象領域への視線停留時間、対象領域への視線停留回数、別の箇所を見て対象領域に再び視線を戻した回数を検討した。

5. 質問紙調査

フェイスシートで性別、年齢を尋ねた後、攻撃性を測定するため、日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（安藤・曾我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井，1999）について回答を求めた。下位尺度は短気、敵意、身体的攻撃、言語的攻撃で計24項目、5件法。動画視聴後に Google フォーム上で回答してもらった。

6. 倫理的配慮

対象者に対して、目的、方法、参加の自由、匿名性の保障、研究を辞退しても不利益がないこと、学会発表および論文投稿を行うことについて口頭と文書にて説明し、同意書へのサインで承諾を確認した。

III. 結果

1. 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙の信頼性

日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙の内的整合性を確認するため、先行研究（安藤・曾我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井，1999）に則って下位尺度に分類し、Cronbach の α 係数を算出した。

その結果、「短気」は $\alpha = .78$ 、「敵意」は $\alpha = .84$ 、「身体的攻撃」は $\alpha = .73$ 、「言語的攻撃」は $\alpha = .84$ であった。したがって、いずれの下位尺度も十分な内的整合性を有していることが確認された。そこで、いずれの下位尺度においても、各下位尺度の構成項目得点の総和を項目数で除した値を各下位尺度得点とした。

2. 視線に関する各指標の基本統計量

各領域に1度でも視線を向けた者は、いじめ被害者(AOI1)は47名(90.4%)、いじめ加害者(AOI2)は3名(5.8%)、傍観者(AOI3)は46名(88.5%)、主人公(AOI4)は15名(28.8%)であった。

対象領域を最初に見るまでに要した時間の平均時間は、いじめ被害者(AOI1)は514.97秒、いじめ加害者(AOI2)は32.01秒、傍観者(AOI3)は504.33秒、主人公(AOI4)は163.87秒であった。

対象領域への視線停留時間の平均時間は、いじめ被害者(AOI1)は1.04秒、いじめ加害者(AOI2)は0.01秒、傍観者(AOI3)は0.58秒、主人公(AOI4)は0.06秒であった。

対象領域への視線停留回数の平均回数は、いじめ被害者(AOI1)は4.75回、いじめ加害者(AOI2)は0.13回、傍観者(AOI3)は3.35回、主人公(AOI4)は0.42回であった。

別の箇所を見て対象領域に再び視線を戻した回数の平均回数は、いじめ被害者(AOI1)は0.81回、いじめ加害者(AOI2)は0.04回、傍観者(AOI3)は0.96回、主人公(AOI4)は0.04回であった。

なお、いじめ加害者(AOI2)へ視線を向けた者は3名(5.8%)と少なかったことを踏まえ、以降の分析からは除外することとした。

また、これ以降の分析では、各指標において視線を向けた者のデータのみで分析を行う。

3. 性差に関する検討

攻撃性の各下位尺度ならびに視線に関する各指標の性別による差の検定を行うため、*t* 検定による分析を行った。

その結果、攻撃性については、いずれの下位尺度においても性差は認められなかった($t(48)=.15\sim 1.10, n.s.$)。

また、視線に関する各指標については、いじめ被害者(AOI1)の「視線停留回数」において、男性の方が有意に多かった($t(43)=2.05, p<.05$)。しかしながら、それ以外については、いずれも有意な差は認められなかった($t(13\sim 43)=.04\sim 1.72, n.s.$)。

このように、多くにおいて性差が確認できなかったため、以降の分析ではすべての対象者について分析していくこととした。

4. 攻撃性各下位尺度による対象者の分類

攻撃性の違いによって視線に関する各指標がどのように異なるかを検討するため、まずは攻撃性各下位尺度によって対象者を群分けすることとした。群分けについては、下位尺度ごとに平均値を算出し、その値を基準として対象者を高低群分けした。攻撃性各下位尺

度の平均値は、「身体的攻撃」は $M=2.02$ 、「短気」は $M=2.64$ 、「敵意」は $M=2.71$ 、「言語的攻撃」は $M=3.02$ であった。

5. 「身体的攻撃」高低群による視線に関する各指標の違い

「身体的攻撃」高低群によって、視線に関する各指標に違いがあるかを検討するため、*t* 検定を実施した(Table1)。

その結果、いずれについても有意な結果は得られなかった。

6. 「短気」高低群による視線に関する各指標の違い

「短気」高低群によって、視線に関する各指標に違いがあるかを検討するため、*t* 検定を実施した(Table2)。

その結果、いずれについても有意な結果は得られなかった。

7. 「敵意」高低群による視線に関する各指標の違い

「敵意」高低群によって、視線に関する各指標に違いがあるかを検討するため、*t* 検定を実施した(Table3)。

その結果、いずれについても有意な結果は得られなかった。

8. 「言語的攻撃」高低群による視線に関する各指標の違い

「言語的攻撃」高低群によって、視線に関する各指標に違いがあるかを検討するため、*t* 検定を実施した(Table4)。

その結果、いじめ被害者(AOI1)と傍観者(AOI3)についてのみ、「別の箇所を見て対象領域に再び視線を戻した回数」に有意な差が認められ、いじめ被害者(AOI1)については「言語的攻撃」低群の得点が、傍観者(AOI3)については「言語的攻撃」高群の得点が、それぞれ有意に高かった。

IV. 考察

1. 性差について

本研究の結果、攻撃性については性差が認められなかった。安藤・曾我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井(1999)では、「短気」以外の「敵意」「身体的攻撃」「言語的攻撃」および全攻撃性において男性の方が有意に高い得点を示すことが明らかにされている。攻撃性の性差について検討した横田(2017)においても、男性の攻撃性が高いという研究は多く、幼少期からその差は顕著であることを指摘している。一方、視線に関する各指標についても、多くの場合に性

Table 1 「身体的攻撃」高低群による視線に関する各指標の違い

		低群			高群			t 値
		n	M	(SD)	n	M	(SD)	
AOI1	対象領域を最初に見るまでに要した時間	27	569.87	(.79)	20	569.85	(.53)	.11
AOI1	対象領域への視線停留時間	27	1.11	(.66)	20	1.19	(.50)	.43
AOI1	対象領域への視線停留回数	27	5.56	(3.99)	20	4.85	(2.98)	.66
AOI1	別の箇所を見て対象領域に再び視線を戻した回数	27	.85	(1.10)	20	.95	(.89)	.33
AOI3	対象領域を最初に見るまでに要した時間	26	570.11	(1.24)	20	570.42	(1.20)	.86
AOI3	対象領域への視線停留時間	26	.67	(.56)	20	.63	(.31)	.33
AOI3	対象領域への視線停留回数	26	3.81	(2.02)	20	3.75	(2.15)	.09
AOI3	別の箇所を見て対象領域に再び視線を戻した回数	26	1.08	(1.06)	20	1.10	(1.07)	.07
AOI4	対象領域を最初に見るまでに要した時間	8	570.57	(.24)	7	570.53	(.43)	1.40
AOI4	対象領域への視線停留時間	8	.24	(.19)	7	.14	(.10)	.10
AOI4	対象領域への視線停留回数	8	1.38	(.52)	7	1.57	(.79)	.21
AOI4	別の箇所を見て対象領域に再び視線を戻した回数	8	.00	(.00)	7	.29	(.49)	.39

Table 2 「短気」高低群による視線に関する各指標の違い

		低群			高群			t 値
		n	M	(SD)	n	M	(SD)	
AOI1	対象領域を最初に見るまでに要した時間	24	569.89	(.79)	23	569.83	(.56)	.31
AOI1	対象領域への視線停留時間	24	1.23	(.68)	23	1.06	(.48)	.97
AOI1	対象領域への視線停留回数	24	5.46	(4.03)	23	5.04	(3.11)	.39
AOI1	別の箇所を見て対象領域に再び視線を戻した回数	24	.79	(1.06)	23	1.00	(.95)	.71
AOI3	対象領域を最初に見るまでに要した時間	23	570.33	(1.22)	23	570.16	(1.24)	.47
AOI3	対象領域への視線停留時間	23	.75	(.59)	23	.56	(.28)	1.42
AOI3	対象領域への視線停留回数	23	3.61	(1.90)	23	3.96	(2.23)	.57
AOI3	別の箇所を見て対象領域に再び視線を戻した回数	23	.91	(.90)	23	1.26	(1.18)	1.13
AOI4	対象領域を最初に見るまでに要した時間	4	570.58	(.28)	11	570.54	(.35)	.19
AOI4	対象領域への視線停留時間	4	.28	(.19)	11	.17	(.14)	1.20
AOI4	対象領域への視線停留回数	4	1.50	(.58)	11	1.45	(.69)	.12
AOI4	別の箇所を見て対象領域に再び視線を戻した回数	4	.00	(.00)	11	.18	(.40)	.88

Table 3 「敵意」高低群による視線に関する各指標の違い

		低群			高群			t 値
		n	M	(SD)	n	M	(SD)	
AOI1	対象領域を最初に見るまでに要した時間	25	569.73	(.45)	22	570.01	(.86)	1.40
AOI1	対象領域への視線停留時間	25	1.14	(.54)	22	1.15	(.65)	.10
AOI1	対象領域への視線停留回数	25	5.36	(3.66)	22	5.14	(3.56)	.21
AOI1	別の箇所を見て対象領域に再び視線を戻した回数	25	.84	(.99)	22	.95	(1.05)	.39
AOI3	対象領域を最初に見るまでに要した時間	25	570.49	(1.24)	21	569.95	(1.15)	1.50
AOI3	対象領域への視線停留時間	25	.70	(.57)	21	.60	(.30)	.71
AOI3	対象領域への視線停留回数	25	3.64	(1.80)	21	3.95	(2.36)	.51
AOI3	別の箇所を見て対象領域に再び視線を戻した回数	25	.88	(.83)	21	1.33	(1.24)	1.48
AOI4	対象領域を最初に見るまでに要した時間	8	570.63	(.22)	7	570.45	(.41)	1.02
AOI4	対象領域への視線停留時間	8	.24	(.19)	7	.15	(.11)	1.13
AOI4	対象領域への視線停留回数	8	1.38	(.52)	7	1.57	(.79)	.58
AOI4	別の箇所を見て対象領域に再び視線を戻した回数	8	.00	(.00)	7	.29	(.49)	1.55

Table 4 「言語的攻撃」高低群による視線に関する各指標の違い

		低群			高群			t 値
		n	M	(SD)	n	M	(SD)	
AOI1	対象領域を最初に見るまでに要した時間	23	569.85	(.79)	24	569.87	(.58)	.08
AOI1	対象領域への視線停留時間	23	1.07	(.50)	24	1.22	(.67)	.89
AOI1	対象領域への視線停留回数	23	5.30	(3.42)	24	5.21	(3.80)	.09
AOI1	別の箇所を見て対象領域に再び視線を戻した回数	23	1.26	(1.05)	24	.54	(.83)	2.60 *
AOI3	対象領域を最初に見るまでに要した時間	24	570.29	(1.25)	22	570.19	(1.20)	.27
AOI3	対象領域への視線停留時間	24	.65	(.59)	22	.65	(.29)	.01
AOI3	対象領域への視線停留回数	24	3.42	(1.98)	22	4.18	(2.11)	1.27
AOI3	別の箇所を見て対象領域に再び視線を戻した回数	24	.71	(.62)	22	1.50	(1.26)	2.66 *
AOI4	対象領域を最初に見るまでに要した時間	9	570.65	(.31)	6	570.39	(.31)	1.59
AOI4	対象領域への視線停留時間	9	.24	(.19)	6	.13	(.07)	1.66
AOI4	対象領域への視線停留回数	9	1.67	(.71)	6	1.17	(.41)	1.56
AOI4	別の箇所を見て対象領域に再び視線を戻した回数	9	.11	(.33)	6	.17	(.41)	.29

* $p < .05$

差が認められなかった。Ellsworth & Ludwing (1972) は、視線行動には性差が認められる場合が多いとされる。ただし、本研究の対象者は男性が少なく、また全体の対象者数も多いとは言い難い。したがって、今後、より多くの対象者によるさらなる検証が必要であろう。

2. 攻撃性各下位尺度高低群による視線に関する各指標の違いについて

攻撃性の下位尺度ごとに対象者を高低群分けし、その群分けによって視線に関する各指標に違いがあるかを検討したところ、有意な結果が得られたのは「言語的攻撃」高低群においてのみであった。このことについては、対象者が視聴した動画教材が SNS を中心とした言語的攻撃が展開されるものであり、特に分析対象となった場面は、被害者が加害者によって直接的な言語的攻撃を受けた直後であったことが関係しているのではないかと推測される。言語的攻撃場面を視聴したことによって視聴者自身の言語的攻撃の高さによる特徴が喚起され、その後の視聴状況に影響がもたらされたものと考えられる。

具体的には、まず、「言語的攻撃」低群は、いじめ被害者に対して「別の箇所を見て対象領域に再び視線を戻した回数」が有意に多かった。このことは、「言語的攻撃」低群が、いじめ場面直後の段階で「被害者はどうしているだろう」「被害者は大丈夫だろうか」と案ずる気持ちが先に立ち、いじめ被害者を何度も繰り返し視線に捉えようとしていることを示しているのだと考えられる。Kanakogi, Okumura, Inoue, Kitazaki, & Itakura (2013) は、生後 10 か月の段階から人は社会的相互作用における被害者と加害者の役割を評価し、その評価に基づいて被害者をより選好すると指摘している。その上で、これは苦痛を感じている他者に対する初歩的な同情であり、後の本格的な共感行動を取るための基礎として機能する可能性があることを示唆している。したがって、「脱いじめ傍観者教育」動画教材を視聴させる際、被害者の様子を積極的に観察させるようにすることは、「言語的攻撃」低群を傍観者にとどまらせず、後に仲裁者として機能させるために必要な支援方法ではないかと考えられる。

一方、「言語的攻撃」高群は、傍観者に対して「別の箇所を見て対象領域に再び視線を戻した回数」が有意に多かった。このことは、「言語的攻撃」が高い者は、加害行為を行った直後に被害者ではなくむしろ周囲の状況を気にしやすい傾向にあることを示していると言えよう。清水・瀧野 (1998) は、小学生に対する 4 コマ漫画を用いた実験的研究において、第三者が援

護するような条件では加害者の反省や謝罪などを引き出しやすく、第三者の行動が援護に向かわない場合は加害者のさらなるいじめを導き出しやすいことを明らかにしている。この点も併せて考えると、「脱いじめ傍観者教育」動画教材を視聴させる際、「言語的攻撃」高群に対して周りの様子をよく観察させ、「加害者はどう思われているだろう」ということを考えさせることが重要になってくるだろう。それと同時に、被害者の様子にも気づかせ、被害者の気持ちを推測させるような働きかけも行う必要がある。

しかしながら、実際の仲裁行動の生起には、子ども自身の援助要請コーピングスキルや学級風土の影響などの多様な要素が影響していることが示されている (西野, 2022)。特に学級風土に関しては、本研究で用いた「脱いじめ傍観者教育」動画教材の効果を高めるためにも重要な要素である (青山・五十嵐, 2019) と指摘されていることは、既に述べたとおりである。したがって、日常的な学級風土づくりが基礎となり、その上で各子どもの攻撃性の程度に合わせた働きかけを行うことが重要であると考えられる。

付 記

本研究の一部は、日本学校保健学会第 69 回学術大会で発表した。

引用文献

- 阿部 学・藤川 大祐・山本 恭輔・谷山 大三郎・青山 郁子・五十嵐 哲也 (2018) . 脱・傍観者の視点を取り入れたいじめ防止授業プログラムの開発—選択と分岐を取り入れた動画教材を用いて— コンピュータ&エデュケーション, 45, 67-72.
- 青山 郁子・五十嵐 哲也 (2019) . 脱・傍観者の視点を取り入れたいじめ防止授業プログラムの効果 日本教育心理学会総会発表論文集, 61, 336.
- 安藤 明人・曾我 祥子・山崎 勝之・島井 哲志・嶋田 洋徳・宇津木 成介・大芦 治・坂井 明子 (1999) . 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性, 信頼性の検討 心理学研究, 70, 384-392.
- Ellsworth, P. C., & Ludwing, L. M. (1972) . Visual behavior in social interaction. *Journal of Communication*, 22, 375-403.
- 藤川 大祐・青山 郁子・五十嵐 哲也 (2016) . ネットいじめの芽における小中高生の傍観者行動と文脈要因の違いにおける差の検討 日本教育工学会第 32 回全国大会講演論文集, 663-664.

- Kanakogi, Y., Okumura, Y., Inoue, Y., Kitazaki, M., and Itakura, S. (2013) . Rudimentary sympathy in preverbal infants: preference for others in distress PLoS One , 12;8(6):e65292. doi: 10.1371/journal.pone.0065292.
- 文部科学省 (2023) . 令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査 https://www.mext.go.jp/content/20231004-mxt_jidou01-100002753_1.pdf
- 文部科学省 (2022) . 生徒指導提要 https://www.mext.go.jp/content/20230220-mxt_jidou01-000024699-201-1.pdf
- 西野泰代 (2022) . 児童生徒の援助要請コーピングと学級風土がいじめ場面での仲裁行動の生起に及ぼす影響 日本心理学会第64回総会発表論文集, 64, 335.
- 清水 貴裕・瀧野 揚三 (1998) . いじめの加害者に影響する被害者と第三者の反応 大阪教育大学紀要 第IV部門：教育科学, 46(2), 347-363.
- 横田晋大 (2017) . 攻撃性の男女差の進化的起源—進化心理学の観点から— 心理学評論, 60(1), 15 - 22.